

特 集 「法創造教育と人工知能」

## 法創造教育方法の開発研究

# —法創造の科学に向けて—

## Research on Development of Legal Education Methods for Creative Legal Minds — Towards the Science of Law Creation —

吉野 一  
Hajime Yoshino

明治学院大学法科大学院  
Graduate Law School, Meiji Gakuin University  
yoshino@ls.meijigakuin.ac.jp, http://

**Keywords:** legal education method, creative legal mind, creation of law

成果を利用し、あるいはさらに発展・展開していくことにより、法創造に科学的にアプローチし、法創造教育方法を開発すべく、かねてより研究を行ってきた。これが、この度の上記の時代の要請ともマッチすることとなったのである。我々は人工知能研究がこの目標実現に貢献できると考えている。また、人工知能研究自体の課題としても、このような創造的な法的思考力の養成という目標に貢献する要素技術の開発は意義のあるテーマであると考えている。

法創造とは、問題解決のために適切な法を新たにつくり出すことである。法創造というと、立法をすぐに思い浮かべるが、法の適用においても、法創造は行われる。すなわち、ハードケースの解決や法規と事実のギャップを埋めるために、法創造が行われなければ、適切な解決が実現されないのである。法適用における推論は、「法的正当化の推論」と「法創造の推論」から成り立っているが、法創造の推論において、法的正当化の推論の枠組みの中で、出来事一事件を法的に解決するためには法の適用結果としての法的決定が創設されるとともに、これを正当化するために、具体的な事実と抽象的法規の間のギャップを埋める解釈法が創設されるのである。我々は、法創造は次のプロセスから成り立っていると考えている。すなわち、法創造の必要性に応じて、具体的な問題を解決するための仮説法ルールを生成、そしてその仮説法ルールが適切かどうかを検証する、というプロセスである。仮説ルールの適切性、言い換えれば、正しさの検証は、反証推論の構造を有しているが、一定の評価基準を必要とする。評価基準は、伝統的な正義や公平の理論や感覚によって提供される場合もあるし、新しくは法と経済学や進化ゲーム論によって提供される場合もある。この評価によって、適切でない、あるいは正しくないと判断された仮説法ルールは放棄されることとなる。新しい仮説法ルールが生成されれば、同様にしてその正しさが検証される。この検証過程では、ある仮説の主張者と反論者との間の、そして法的思考をする人の頭の中での仮説命題と反証命題と

\*1 その研究プロジェクトにおいては「法律エキスパートシステムLES-5」などが開発された。参照：吉野一ほか編著「法律と人工知能」、人工知能学会誌、Vol. 13、No. 2、pp. 2-34 (1998)。  
*Journal of Advanced Computational Intelligence*, Vol.1, No.2 (1997) およびVol.2, No.1 (1998)。

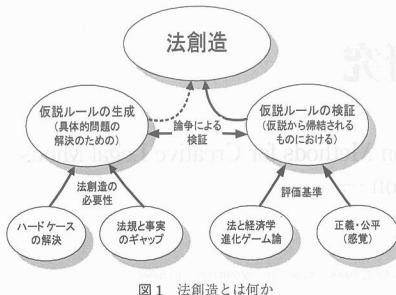


図1 法創造とは何か

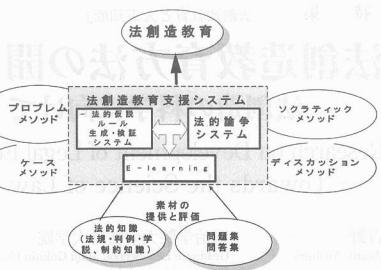


図2 法創造教育方法と法創造教育支援システム

の間の論争が機能している。このような仮説法ルールの生成と検証を繰り返して検証に耐えたもの、すなわち、反証されないもの、あるいは最も反証されることが少なかつたものが、問題解決のための法ルールとして創設され、適用されるのである。上記の原理は図1に表される。

法創造教育とは、学生の法創造思考力を開発する教育である。従来の教育は、結果的には、法的知識の供与を中心とした。これからの(法科大学院での)法学教育では、法的思考力(Legal Mind)の育成に実をあげることが重要である。日本の法律家に特に必要とされているのが、法創造思考力である。

本研究は、まず法適用においてより適切な法を創造する原理と方法の科学的解明を行う。そしてそれを通じて、我が国における新しい法創造教育方法を開発する。その際、人工知能関連技術を利用して法創造教育支援システムを構築する。

本研究プロジェクトのメンバーと研究課題について紹介させていただく。本研究の研究代表者は著者、吉野一である。研究分担者は、新田克己(東京工業大学)、加賀山茂(名古屋大学)、太田勝造(東京大学)、執行秀幸(中央大学)、河村寛治(明治学院大学)、坂本正光(明治学院大学)、鈴木宏昭(青山学院大学)、櫻井成一朗(明治学院大学)、松村敏弘(東京大学)であり、研究協力者は角田篤泰(名古屋大学)、金井貴(明治学院大学)である。本研究は、相互に関連する次の四つの研究課題から構成される(括弧内にその研究課題の分担者をあげる)。

### 1. 法創造基礎の理論的解明

法適用における正義・公平判断の論理分析(吉野)および法と経済学の分析(松村)・ゲーム理論的分析(太田)を行い、より良い法の創造方法の基礎理論の構築を行う。

### 2. 実務と教育における法創造の実際の解明

大陸法における法解釈の事例分析を行うとともに、米国のロースクールでのプロBLEMメソッド(事例問題を解くという形で教育する方法)とケースメソッド(諸判決例から法ルールを抽出するという方法)、ソクラティックメソッド(問答形式で教育する方法)とディスカッション

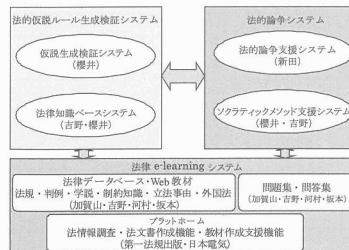


図3 法創造教育支援システム

の間の論争が機能している。このような仮説法ルールの生成と検証を繰り返して検証に耐えたもの、すなわち、反証されないもの、あるいは最も反証されることが少なかつたものが、問題解決のための法ルールとして創設され、適用されるのである。上記の原理は図1に表される。

### 3. 法創造教育方法の開発

上記の四方法を法創造教育のために一層有効に用いる方法を研究し(吉野、加賀山、河村、坂本)、教育効果の教育心理学的・認知心理学的分析(鈴木)を行いつつ、法創造教育方法を開発する。

### 4. 法創造教育支援システムの開発

法創造教育を支援し実現していくために法創造教育支援システムを開発する。開発されるシステムは、関連する法的知識(法規・判例・学説および制約知識)を整理し、問題集や問答集を整備して、Web上および知識ベースに搭載している(吉野・加賀山・櫻井)。また、①法的仮説生成・検証システム(櫻井)、②法的論争システム(新田)、および③e-learningシステム(吉野・櫻井・加賀山)からなる。以上の諸研究分担者の研究が融合して本研究プロジェクトの研究目的「法創造教育方法の開発研究」が実現されるのである<sup>\*2</sup>。

本研究の研究目的と研究課題、そしてその実現方法の観点から整理して図示したものが、図2である。

前述のように、法学教育の方法としては、教育素材の観点からプロBLEMメソッドとケースメソッドからなり、授業の進め方の観点からはソクラティックメソッドとディスカッションメソッドからなる。プロBLEMメソッドは事例問題を解くという形で教育する方法、ケースメソッドはケース(判決例)からルールを見つけ出すという形で教育する方法である。ソクラティックメソッドは教師が学生に質問し学生が答えるという問答形式で教育する方法、そしてディスカッションメソッドは、学生のディスカッションを教師が導くという形で教育する方法である。我々は、これらを統合的に用いるという方向で法創造教育方法を開発している。そしてそれを支援する法創造教育支

援システムとしては、Web教材作成・提供を中心とするe-learningシステムを基盤として、仮説法ルールの生成・検証システムと法的論争システムを構築している。

前者は法律知識ベースシステム LES-5 を発展させる形で、後者は新田がその法的論争システムを発展させる形で、開発し、さらにソクラティックメソッド支援システムを新たに開発している。e-learningシステムとしては、法学教育に一般的に利用可能なプラットホームも構築している。なお、e-learning のプラットホームの開発については、日本電気株式会社および第一法規出版株式会社に協力をいただいている。開発される法創造教育支援システムの構造と開発担当者を、図3に示す。

最後に、一言付言したい。法は、平和な社会、より良い社会を実現するための、社会的道具である。より良い法が創造されていくことが、より平和な社会、より良い社会を実現していくために必要である。これまでの法学は、厳密な意味では、法創造に関する科学的方法を持ち合わせてはいなかった。科学的方法に裏打ちされ、助けられて、より良い法を創設していくことが人類社会の発展のために要請される。本研究は、人工知能の理論と技術を応用した「法創造の科学」の確立へ向けての努力でもある。本研究プロジェクトに携わっている者は、本研究により、「法創造の科学」への道が開かれることを願っている。

2004年7月1日 受理

### 著者紹介



吉野一(正会員)

1962年慶應義塾大学法学部卒業。1968年同大学院法学研究科博士課程単位取得退学。1972年明治学院大学法学部専任講師、1975年同助教授、1982年同教授、2004年明治学院大学法科大学院教授。

\*2 本特集号への執筆は、このうち1から太田・松村および吉野が、2から加賀山が、3および4から吉野・櫻井が、そして4から新田・櫻井が担当した。